

階級間格差には、英語がついて回った。教養ある人々というのは英語が話せた。但し、多くは正確な英語ではなくスリランカ流の英語であった。ホストファミリーである大地主のチャールス・アビクーン氏は、カレッジで英語を学んだことを誇りにしていたが、見せたい物があるのでいらっしやいな、という場合単に“come”と表現した。“follow me, please”ではなか



ドライバー 地主 そのいここ

った。恐らく知らないのであろう。翌日お世話になったホストファミリーである弁護士の女史は、なかなか話せたが強圧的な物言いで婉曲表現など使えなかった。又、同女史の弟(医者)が遊びに来ていたが、英語を良く話せたが姉に輪をかけた強圧的な物言いであった。医者という特権階級意識がそうさせたのか分からないが、何でも質問をしてくれというので英語で質問すると全く関係ない答えが返ってきた。他者の質問に対しても同様で、上層階級の者に逆らう者などかつていなかったのだらう。勝手気ままを許すようになったのだらう。あまりの強圧的であったのでこの医者には、使用済み注射や医療廃棄物に関する質問を浴びせました。またダイオキシンによる土壌汚染や水質汚染などの環境問題についても質問しました。即答できないので、病院に電話をして回答を求めるなどし、医療廃棄物については無知であったことが分かり、困惑していました。自尊心に傷がついたようで、帰り間際私のところにやってきて改めてそのことについて話をしに自ら寄ってきました。



弁護士 医者

また、以前日本に農業研修生として来日していたニーラカンティ女史宅で招宴があり親戚一同が揃って賑やかに持て成してくれた。その中でニーラカンティ女史の夫(材木商)が我々に紹介した一人に教師がいた。英語教師と紹介された。私は遣って色々話題を提供するのだが、通じない。どうやら彼が英語教師ではないことを見て取った。件の教師が、私に向かって貴方の発音は聞き取りにくいと言っていた。しかし、実は、彼は全く話せないのだった。ニーラカンティ女史の夫が誤って紹介したのだった。暫く後、彼の兄が登場した。駅長だということで弟より話せた。但し、現地全ての人がそうだが“R”の発音に癖があり慣れないと聞き取れない。また、アジア人の英語は“PH”で Fの発音が困難であるように、スリランカの人も例外ではなかった。「象」elephant エレファント⇒エレパント。Philippines フィリピン⇒ピリピンと発音していたのも印象的であった。



宿舎のホテルでも階級上昇のためには英語が不可欠であることが分かった。ボーイ・ハウスキーパーは、片言だがフロントの女史は癖があるがまあ話せていた。最終日タクシーを貸切り、一日中市内を回ったが、ドライバーは片言ではあったが話せた。昼時になったので、辛い物ではなく無難な西洋料理を取ろうという話になり、英国風パブで昼を、夕食はヒルトンホテルの超一流イタリア料理店で贅沢をした。ボーイ長らしき人物の案内を受け、オープンテラスでなく冷房の効いた別室に入ったがなかなか話せていた。ワインと本日のお薦め料理は何かと聞いた時にすらすらと答えていた。彼に代わって出てきた若いボーイもなかなか話せた。それで、英語が巧いのでさぞかし給料は良いのだらうと聞いたら不平不満の答えが返ってきた。2500ルピーしか貰っていない(因みに1ルピー=1円で熟練労働者一日の日当500ルピー、だから一般労働者の2倍の月給)、と。英語が出来るからもっと貰っても良いはずだと思っているらしかった。印象的な場面だった。



また英語が使える女性の場合は、国内で働くより賃金の高いメイドとして中東に出稼ぎに行くらしい。

兵庫県立高砂南高等学校 浦上壽一郎先生原稿より引用

私のBroken-Englishはさておいて、人間のコミュニケーションは「身振り、表情が55%。声の調子が35%。そして言葉が10%である」と筑波大学のある教授が本に書いた。とりわけ、スリランカは母国語がシンハラ語、タミール語である。前出のように英語はある程度通用する。JICAでの約1時間の研修と指差し会話表が予備知識としてのすべてであった。この現地の言語無くしてどれほどのコミュニケーションが取れるかどうか、自分自身への課題であった。

そもそもヒトは、草原から森へと移り、言葉を覚えた。その代わりに立体視できる視野が広がり、横からの敵に対する警戒がなくなった。そして、白い目の部分が増えたといわれている。言語としての会話でなく、ボディランゲージを主にした会話ができる、2学年のマスコットの「くま」のお馴染みのぬいぐるみ「たけしくん」を随行させた。沖縄の修学旅行と2回目のお出かけであった。それは、手首までが入れることができ、指でぬいぐるみのジャスチャーができ、腹部には鳴笛がはいっている。これを利用して子どもたちとのコミュニケーションを図った。

アジャンタ氏宅で彼の子どもたち、仏教寺院運営の日曜学校の子どもたち、ニーラカンティ氏が教鞭を取る小中一貫のPuakwatiye公立学校での子どもたちとのコミュニケーションに使用した。

日曜学校では、現地のお約束の挨拶「アー・ユー・ポーワン」(長生きをしてください)ともに鳴き笛を鳴らすと、爆笑の渦。授業でも子どもたちが貸してとおねだりをされました。日本人や日本語が珍しいので、最後皆サイン責めにあいました。もちろん日本語のひらがなでノートに「くまのなまえは、たけし」と書きまくりました。

また、DON BOSCO(ドン・ボスコ会)が行っている学童保育施設「DROP-IN-CENTRE」を訪問しました。

突然の訪問にも関わらず子どもたちは熱烈歓迎で、ブランコ、サッカー・バレーボールなど一緒に興じました。スリランカ出発前に松元先生が「スリランカ名」をつけてもらって来いというリクエストがありました。そこで一緒に遊んだリンラ少年(14歳)から、同じ髭を生やしている人間だから名前をくれというので、早く、「リンラ」をくれました。ちなみにここでの会話はすべて英会話であったが、無難に通じた。この14歳は怪しいけど…



日本の伝統文化でもあるけん玉で子どもたちと遊びコミュニケーションをはかることもしました。私もある程度けん玉ができます。自称2級の腕前?こつを教えるため体の部位を示すことや剣先に玉が入り大喜びをするなど盛り上がりました。

私達は、「YES」を意思表示する会釈で首を縦に振りますが、スリランカでは首を横に軽く振ります。あとで調べるとネパールやブルガリアなどでもそうするらしい。最初見たときは、こいつ人をおちょくっとるうかと思いました。だってそうではなかったのです首を縦に振るのは「YES」、横に振るのは「NO」というのが世界共通だと思うのはNG!この首を横に振るのですが、実は顎先で8の字を横に、そう無限ですね。この「∞」を顎先で書くようにゆっくり振るのです。事実この後、結構見かけるようになりました。その後、改めて国の違いを感じると同時に、勝手に日本と同じ、との思いこみが生じるトラブルに注意をするようになりました。皆さん他国で首を横に振る時は注意しましょう。ちなみに、現地の人に聞くとこの国で「ノー」は別に動作で示すことは無いと返事がありました。



英語で授業…



もてもて「たけしくん」

